

アクティブラーニング

動き出す学校と先生たちの実践レポート

# AL型授業への挑戦

生徒が主体的に、学びを楽しんでいる授業は、すべての教員が目指すところではないでしょうか。アクティブラーニングの視点からの授業(以下「AL型授業」)はそれを目指す学校や先生方により実践されてきていますが、地域や学校の枠を超えて授業改善の研究を行う有志の会も増えてきました。今回はその先駆けである「アクティブラーニング型授業研究会くまもと」の取り組みをご紹介します。

取材・文／長島佳子 撮影／木下将



## 第9回 アクティブラーニング型授業研究会くまもと

**授業改善を目指す個人が集まり  
情報、ノウハウ、勇気を共有。  
まず教員から主体的に学び始めている。**

**ゴールのない授業改善に  
仲間と一緒に取り組んでいく**

「アクティブラーニング型授業研究会くまもと」は、豊永亨輔先生と溝上広樹先生が、AL型授業の先駆者である小林昭文先生(現・産業能率大学教授)の取り組みを雑誌で知り、それぞれが自身の授業で取り入れていたことから始まった。熊本が郷里である小林先生が里帰りする際に、一堂に会する機会を得た。

「そのときに豊永先生たちと、自分なりにやってきた授業改善をみんなと共有して勉強しましょう、ということになったのです」(溝上先生)

2013年に3名でスタートした勉強会が今では150名にものぼり、九州を中心に、関西や東北のメンバーも含む全国的な組織となっている。

活動は、お互いの授業を参観し合うことから始め、AL型授業に関わるさまざまな講師を招いたワークショップ、リフレクションの研修会など多岐に渡っている。また、メンバーはメーリン

グリストでつながっており、授業改善に役立つ情報を共有している。

研究会の目的は、授業をより良くすること、それを一緒に考える仲間ネットワークを広げることだ。

「AL型授業を始めて何度も心が折れそうになりましたが、この会の仲間にも勇気をもらいました。今は、学校の管理職が積極的にAL型授業を推進しているため、自分が授業研究係を任されています。そして、校内にAL推進チームができました。校内での広め方も、研究会の先生方に相談することもあります」(井上梢先生)

「生徒に主体性をもたせる授業をする、喜んで学ぼうとします。講義型では一定の強制力を働かせる必要がありました。AL型授業の方法論に正解はなく、学校や教科、生徒の状況に合わせた授業をつくらなければなりません。最初は誰でもうまくいかず、一度失敗するとやりたくなくなり、学校や教科を超えた仲間と一緒に練

り上げていけるのがこの会なのです」(豊永先生)



溝上広樹先生

「アクティブラーニング型授業研究会くまもと」代表。熊本県立苓明高校。生物担当。理学の博士号をもつ。研究会でのニックネームはプリンス。



井上 梢先生

熊本県立翔陽高校。生物担当。2児の子育てをしながら、数字や平仮名を楽しそうに学ぶわが子を見て、「学びはそもそも楽しいことのはず」と気づいた。



豊永亨輔先生

熊本県立東稜高校。生物担当。学校心理士・上級カウンセラーとして不登校支援にも携わり、生徒が授業を楽しめれば不登校対応にもなると考えている。

2016年度は「授業づくり」をテーマにした講座を開催。研究会メンバーがつくった授業を参加者たちで練り上げて実践する講座を行った。その様子を次ページでレポートする。

「ALはあくまで手段で、生徒が学びを楽しめる授業を行うことが目的で、その中でチカラを伸ばしてほしいと考えています。授業改善にゴールはありません。自分の学びたい欲が続く限り、研究会も続けたいですね」(溝上先生)

次ページにつづく

アクティブラーニング4連発!  
授業づくり実践講座 in 熊本

# 学校・教科を超えた学び合いならではの 多様な気づきのある授業づくり

2016年12月に行われた、「アクティブラーニング型授業研究会くまもと」の実践講座の様子をレポートします。  
当日は9:30から17:00までの終日、3部構成で密度の濃いワークショップが行われました。

## 模擬授業を担当した先生方



吉村潤也先生  
(地学)  
熊本県立東稜高校



前川修一先生  
(日本史)  
明光学園中学・高校  
(福岡県大牟田市)



寺本幸信先生  
(生物)  
熊本県立  
熊本西高校



黒木真琴先生  
(現代文)  
熊本県立  
八代清流高校

初参加のメンバーも多かったが、初対面同士でも熱く議論が行われていた。



授業者にひとりずつ付くサポーターは、グラフィッカー(書記)として、議論の内容を可視化できるように模造紙に記録していく。

この日の講座の目的は、さまざまな学校や教科の教員が集まって、共に授業をつくり上げていくこと。模擬授業を担当する4名の先生が作成してきた授業案を、より良いものに練り上げていく。

まず、授業者から授業の題材、目的、問いやそのねらい、仕組みの概要を全体に向けて説明を行う。その後、出席者はどの授業づくりに参加するかを決め、授業者ごと

のグループに分かれる。模擬授業を行う前に、各グループで授業者が作成した授業案についての事前検討会を行う。この際、議論が円滑で活発になるように、「言いたいことは溜めずに言ってみよう」「誹謗中傷はしない」など自分と他者を尊重するグラウンドルールを溝上先生から説明。

検討会では「授業の流れが授業の目標に向かう構成になっているか?」「問いが広すぎるのでは?」など、さまざまな意見が出ていた。それらを受け、模擬授業で実践するために、授業案をブラッシュアップしていく。

## 第1部

授業者による模擬授業の説明と、全員による授業検討会

**教員同士の意見の出し合いで、授業を練り上げる**

## 第2部

4人の先生の模擬授業実施

**生徒役として授業を受けることも  
新たな気づきを得る体験となる**

午前中の第1部が終わり、事前検討会で練り上げた内容を基に、昼休みのわずかな時間に授業案を改善させていった先生たち。また他グループの授業時は生徒役になるため、他グループの授業資料も読み込んでいた。午後には始まった第2部では、4名の授業者が順番に30分ずつの模擬授業を実践。

午前中の第1部が終わり、事前検討会で練り上げた内容を基に、昼休みのわずかな時間に授業案を改善させていった先生たち。また他グループの授業時は生徒役になるため、他グループの授業資料も読み込んでいた。午後には始まった第2部では、4名の授業者が順番に30分ずつの模擬授業を実践。

AL型授業が初めての参加者にとつては、授業者のさまざまな工夫の「つひとつが「生徒が主体的に学びたくなる授業」として、気づきと学びにつながっていたようだ。また、教員が生徒役になって、生徒目線で授業を体験することも、単なる授業見学会とは異なる発見にもつながっていた。合計2時間の模擬授業中、参加者の誰もが集中力を切らさない気迫も相当なものだった。



寺本先生はDNAの働きを暗号の読み解きになぞらえて、興味を喚起していた。



吉村先生は地学現象がどこで起きているかを、個人とグループワークで考える授業。



授業者と同グループの人は、練り上げた授業が目的通りに進んでいるか観察。



黒木先生は「沙魚」を題材に、比喻や象徴をマインドマップを使った読解を行った。



前川先生の授業は人権学習。看圖アプローチによるクイズやKP法を用いて女性差別の歴史や現状を意識化。

模擬授業の振り返り会

全員がすべての授業を振り返る  
白熱した議論で授業がさらに深化

模擬授業終了後には授業の振り返りが行われた。振り返りは再びグループに分かれ、ワールドカフェ方式で授業者がすべての参加者から、順々に感想や意見を聞ける。

最後に全体での共有、個人でのリフレクションシートの記入でこの日の講座は終了した。終日にわたる密度の濃い研修会ながら、参加者の先生たちに疲れの表情は見えず、語り足りないという雰囲気すらあった。普段は学校で試行錯誤、孤軍奮闘してA-L型

元のグループも事前検討会以上に白熱していた。参加者たちはそれぞれの授業に対して良いと思っただことを口々に伝えたり、生徒役をやってみて今までの授業で感じたことのない思いを伝え合ったりしていた。事前検討会での授業の練り上げの成果を実感していた先生も

元のグループ以外の授業者のもとへ順次まわって振り返り。生徒役目録での感想を議論。

授業を実践している参加者にとっては、学校や教科を超えた仲間との学び合いは貴重な体験であり、多くの気づきを得られる場のようにだ。生徒の主体性、能動性を引き出す授業をするためには、まず教員自身がアクティブに他者の考えを聞き、意見を交わして学びの楽しさを実感するべきだと、あらためて感じることもできた講座だった。組織としてA-L型授業の推進に取り組み学校も増えてきた一方で、「何から始めていいかわからない」と立ち止まる学校や教員も少なくない。生徒のために前に進むには、個人が集まったこの研究会のような活動にも期待したい。

元のグループで授業を振り返り、事前検討会でブラッシュアップさせた効果などを検証。



サポーター担当者は、最終議論の内容を模造紙に記録。他のグループで出た意見がわかる。



元のグループ以外の授業者のもとへ順次まわって振り返り。生徒役目録での感想を議論。



参加者たちは感じたことを伝え合い、他の参加者の意見にも興味深く耳を傾けていた。



模造紙にびっしり書き込まれた議論や授業の様子。授業の練り上げの過程が見てとれる。

研究会役員の方々の感想



写真左から、豊田拓也先生(熊本県立八代清流高校)、今村清寿先生(熊本県立第二高校)、代表の溝上先生、模擬授業を担当した前川先生、寺本先生

**今村先生**「AL型授業はマニュアル通りに進められるものではなく、マインドセットが変わらなければ意味がありません。また、大事なのは授業の練り上げです。学校では教科ごとの縦割りになりがちですが、教科を超えて考え合わせるこの研究会は貴重な場です」

**前川先生**「文科省もAL型授業の推進を唱えています、国レベルの政策と、我々のような草の根の活動の両輪がないと現場は変わりません。それには『変えたい』という人と人とのつながりが大事です。ネットで広く呼びかけてつながった人同士が、リアルに集まることでお互いの研究を深め、広めることができます。例えば、この会で出会った溝上先生に私の学校の講習会に来てもらうなど、ここでの出会いを自校に紹介することで確実に広がっていると感じます」

参加した先生方の感想



写真左から、初参加の横川淳先生(コムタスグループ・広島)と、緒方裕美先生(宮崎商業高校)。末吉勝也先生(鹿児島純心女子中学・高校)は3回目の参加。

**横川先生**「イキイキした勉強会で、部屋に入った瞬間から先生方の不思議な熱量を感じて楽しかったです。自分は塾の講師ですが、学校の教員外も受けて入れてくださる度量の広さに感謝しています」

**緒方先生**「生徒役になる講習を初めて受けましたが、自分の意見を言えて取り入れてもらい、そこからまた授業が発展していく楽しさに感動しました。それを生徒たちや、自校の先生たちにも感じてほしいと思いました」

**末吉先生**「AL型授業を実践するようになってから、課題に対する自分の考えを言葉でアウトプットする習慣が付き、生徒の記述力が上がりました。この研究会で学んだことをすぐ自校で取り入れると、『おもしろい!』と賛同してくれる仲間が校内にも増えました」